

バングラデシユは人口一億三〇〇〇万人、世界第四位の米の生産国だが、その半分が飢餓に苦しんでいる。灌漑施設が不備で、天候の影響を受けやすく、台風や洪水の被害が大きい。貧富の差が甚だしく、衛生の悪さから疾病で死亡する率も高く、多くの国民が貧しい生活にあえいでいる。

このなかで、小口金融で生業にはげみ、活路を見いだす人びとが増えている。

飢餓と病氣、多い乳幼児死亡率

ばい菌に汚染した井戸水をそのまま飲み、下痢で死亡する人も多い。回虫も多い。乳幼児の死亡率は高く一〇〇〇人に対して一〇六人。ちなみに、日本の四人に比べて極めて高い。赤ちゃんのへその緒を汚いハイシャ(ナイフ)で切ったりして破傷風で死亡する。妊娠中毒で亡くなる女性も多い。平均寿命は五六歳と低い。

こうした国情のなかで、国民を貧困と飢餓から救う大きな支えとなつてゐるのは、マイクロクレジットといわれる小口融資だ。

グラミン銀行が、土地や財産を持たない貧しい人びとに二五〇〇円を融資し、小さな商売を始め

経営の散歩道

飢餓と貧困を救う 小口金融

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

せる。担保は取らない。借りた人々は希望に燃えて、せっせと働いている。搾取のない自立した生産にはげみ、生活に活路を見いだすことができるようになった。

貧民だけに貸す銀行

グラミン銀行は、一九八三年に貧しい人たちだけに金を貸す銀行として発足した。

最初は、総裁のムハマド・ユヌス氏が、自らが保証人となつて、二六ドルの融資を受け、それをもとに事業を起こし、それから「人間の信頼」をもとに融資の挑戦が始まった。女性を中心にした無担

保の少額融資を拡大していった。グラミンはベンガル語で農村を意味する。その名のとおり、貧しい農村が貧困から抜け出る支援を行ってきた。

首都ダッカをはじめ、各地に二〇〇の支店があり、七万のセンターと四五万のグループのもとで、二四〇万人が借入れ資金を活用している。

サインから企業知識を学ぶ

融資を受けるためには、まず五人が一組になって、銀行のメンバーになる。

次に、研修を受けて、自分の名前のサインの仕方や生活の改善、企業についての知識などを身に付ける。五人のうちで、最も融資を必要としている二人が最初に融資を受ける。借り手を五人一組で連帯保証する。

毎週定期的な会合を開く。銀行の担当者は、村々をまわつて、その会合に出て、資金を回収する。残りの三人も、順次貸し付けを受けられる。

銀行には融資の年に二〇%の利息が入る。グラミン銀行の資金の九三%は自己資金で、七%が政府からの借入れ。自己資金という

のはメンバーからの預金である。つまり、貧困者が支えている銀行ということになる。

融資を受けた人は二四〇万人。うち、三分の一は貧困から抜け出した。「小口融資で貧困から救える」というこのシステムが世界八〇国に広がりを見せている。

総裁ユヌス、学者から実践家に

グラミン銀行の総裁ムハマド・ユヌス氏は、六〇年代にアメリカで経済学を学び、バングラデシユ独立後に帰国して、母校のチッタゴン大学で教鞭をとっていた。

しかし、学校で教える経済学の理論とはうらはらに、現実には餓えと貧困に苦しむ人達を救えないギャップに悩んでいた。

一九七四年に大飢饉が襲った。そのなかで、せっせと竹細工に励み、一家を支え子どもを育てる農村の女性たちと出会ったのが転換の機を与えた。

バングラデシユでの女性の地位は低い。結婚時には巨額の持参金が求められ、結婚しても、すぐに離婚させられたり、暴力を振るわれたりする。しかし、そうした条件にも耐えて、毎日を戦い抜く女性。わずかな元手さえあれば、

その技能を活かせる。働き続けられ
ば生業が成り立つと考えた。

経済こそが人びとを活かす

「貧困というのは、経済制約のため
に、自分の潜在能力を引き出す
チャンスを失い、自由のない状態
をさす」、ユヌス総裁はこう語る。

まるで、盆栽の木のように、本
当は大きくなれるのに、小さな器
に入れられて、その能力を発揮で
きないで終わってしまう。この状
態から貧困者を抜け出させること
ができるのは、経済の力であるとい
う。

「経済力こそが、人々に自らを活
かすチャンスを与え、自由で居ら
れ、本来の能力を発揮し行動させ
ることができると」という信念に立
っている。

ユヌス総裁によれば、チャリ
ティ(慈善)は悪であり、人々の
自立をさまたげる。恵んであげる
のは、相手がかわいそうなもの、
自分より下なものと意識があり、
チャリティによって自尊心や
自立心を奪い、結局、その人たち
のためにならないという。

日本のODAについても、橋や
道路を作っているだけで終わって
しまう。マイクロクレジットは次々

と還元され、その資金は拡大再生
産できる。日本も、マイクロクレ
ジットに資金を回して欲しいと述
べている。

日本の金融を中小企業へ

グラミン銀行とは比較にならない
いが、日本の金融機関の融資先は、
大企業向けが増え、中小企業向け
が減っている。

金融機関の貸付をみると、平成
一〇年三月と一四年末を比べると、
大企業への貸出しは八兆円増えた
が、中小企業へは五六兆円も減っ
ている。

経済の活力を担うには中小企業
であり、地方である。日本経済を
再生するには、融資に対する姿勢
を改めなければならない。

今年三月、金融庁は、新たに「リ
レーションシップバンキング」(略
称・リレバン)の機能を強化する
方針を打ち出した。リレバンは中
小企業の貸出しに当たって、決算
内容だけでなく経営方針や将来性、
経営者の人柄も斟酌する。経営者
からの借入金は会社の自己資本と
評価するといった内容だ。

いま、金融に必要なのは、数字
を超えた「人間の信頼」の視点で
はないか。